

メッセージ「今、命が私を生きている」

牛田 匡 牧師

聖書 ヨハネの手紙 I 5章10-21節

先月までは雨が全然降らないと思っていましたが、今週は毎日のように雨が降っています。しかも、晴れていたかと思うと、急に黒い雲が立ち込めて土砂降りの雨が降り出します。洗濯物が外に干せず困った一週間でした。そのように天候に振り回されていましたが、ふと気づくと、一昨日は9月11日でした。

「9.11.」というアメリカで同時多発テロが起きた日です。2001年9月11日、日本ではちょうど夜10時のニュースがテレビで報じられていた時だったと思いますが、「緊急中継」といって急に番組が変更され、アメリカ・ニューヨークの世界貿易センターが映し出されました。二つあるタワーの一つからは煙が上っていて、何だろうと思っている間に、二つ目のビルに2機目の飛行機が追突していく映像が中継され、その後しばらくして二つの巨大なビルが崩壊していききました。テレビ画面の向こう側で、一体何が起きているのか、あまりの出来事に状況がまるで理解できなかったことを思い出します。

3000人もの人々が犠牲になったテロ事件でしたが、あれからもう19年が経ちました。あの日以来「見えないテロとの戦争」が始まり、およそ10年間に亘ったイラク戦争や、今もなお収まっていないアフガニスタン戦争が始まりました。テロ事件による数千人の被害者よりも、更に多くの何十万人もの血が流され続けています。さらに他の国々や地域でも紛争は今もなお続いていて、難民となる人々も増え続けています。その一方で多くの国々では極右政党が躍進するようになりました。日本でもそうです。どうして世界中がこんなにも他者に対して思いやりの欠ける不寛容な状態になって来たのでしょうか。社会経済の発展、経済格差の両極化、生活環境や習慣の変化、共同体社会の崩壊、コミュニケーションの変化など、原因として考えられることは数え上げればキリがありませんが、その中の一つに「命への不安」「死への恐怖」というものがあるように思います。自分の命や近い人の命がいつ脅かされるかもしれないという恐怖感から、他人を信頼できなくなり、寛容になれなくなっているような気がしています。

今年の始めから新型コロナウイルスが世界中に蔓延するパンデミックの状態となっています。それに対して「これはウイルスとの戦いであり、我々は必ず勝利する」と勇ましい声を上げている人たちもいますが、治療薬もワクチンも、そんなに簡単には開発されませんし、開発されたとしても、それによってウイルス

がいなくなるわけでもありません。人々の命を守るためという名目で、そのような薬の開発競争が行われていますが、その裏には膨大な利権とお金<sup>ぼうだい</sup>がうごめいて、むしろそのために多くの命がないがしろにされているような気がしてなりません。WHO（世界保健機構）からも指摘がありましたが、お金を持っている国が、お金の物を言わせてワクチンや治療薬を先取り独占してしまうのではなく、今必要とされている所に、適切に配分されるようにされなければなりません。自分自身の中に「価値あり」と思える確固たるものが見出せないからこそ、人は権力やお金などに固執するのではないかと思うと、世界がこれだけ暴走していることの根本には、「命そのものへの不安」というものがあるような気がします。

今日、最初に歌いました賛美歌「善き力にわれ囲まれ」は、第2次世界大戦中にナチスに抵抗したドイツのディートリッヒ・ボンヘッフアー（Dietrich Bonhoeffer, 1906 - 1945）が作詞したものでした。彼は牧師であり、神学者でしたが、第2次世界大戦中にナチスに対する地下抵抗活動に加わった為に逮捕・投獄され、ナチス・ドイツが敗戦となった僅か3週間前（1945年4月9日）に「国家反逆罪」の罪名の下に処刑されました。39歳でした。この「善き力にわれ囲まれ」という詩は、彼が処刑される前年1944年のクリスマスに、秘密警察の獄中より送られた婚約者宛ての手紙の中に同封されていた詞です。その手紙には次のように記してありました。

「私があなたにクリスマスにこの手紙を書くことができ、あなたを通じて両親や兄弟たちに挨拶を送り感謝できるのを喜んでいます。きっと私たちの家は静かな時を迎えていることでしょう。私のまわりが静かになればなるほど、あなた方との結びつきがより深まることを実感できるのです。それは、あなたかも孤独のなかで、魂が日常生活ではほとんど感ずることができないような感覚を育てていくようなものです。それで私は一瞬たりとも、独りぼっちであったり、とり残されていると感ずることはありません。あなた、両親、戦場にいる友人や学生たちはいつも現実として私の前にいるのです。あなたがたの祈りと良き心遣い、聖書の言葉、昔行（おこな）った語らい、音楽、本は前にもまして、命と現実性をもってくるのです。そして、その大きな見ることのできない世界に私は住み、その世界の存在をなんの疑いもなく認めるのです。……ここに、この数日、夜の間<sup>に</sup>浮かんだ詩を記しておきます。この詩は、あなたと両親、兄弟たちへのクリスマスの挨拶です」（『讚美歌 21 略解』294－295頁）。

改めて歌詞を眺めて見ると、秘密警察の獄中の中での重苦しい様子が読み取れます。「過ぎた日々の悩み重く、なおのしかかる時も、さわぎ立つ心しずめ、み旨むねに従いゆく」「たとい主から差し出されるさかずき杯は苦くても、恐れず感謝を込めて、愛する手から受けよう」「我らの闇の中に、主の灯し火を輝かせよう」「静寂だけが拡がる時、済んだ響きを聴こう」。自分たちの計画は失敗に終わり、逮捕され、今もナチの横暴は続き、多くの人々の血が流され、命が奪いとられている。自分は囚われていて、闇の中で、沈黙の中にいる……。そのような時「もしも神がいるなら、自分をここから出してくれ、今すぐ光で照らしてくれ、沈黙ではなく大きな声で語ってくれ」と願う人は多いかと思いますが、彼は違いました。「この闇の中に、沈黙の中に、他でもない神様が共にいて下さって、その善き力で私を囲んで下さっている。この地上で最も小さくされ虐げられ、あの十字架の上で処刑された神の子イエス・キリストが、この苦しみを今、私と共に担って下さっている」。彼にはその確信があったのでしょう。そしてこの歌は彼の死後 75 年を経てもなお、今も私たちの心に響くものとして歌い継がれています。

さて、今回の聖書「ヨハネの手紙」は、「ヨハネによる福音書」とよく似た言葉遣いや表現などがあることから、「ヨハネによる福音書」を書いたのと同じ著者が書いた手紙だと古くから考えられて来ましたが、実際にはいつ、誰が、どこで書かれた手紙なのか、詳細は分かっていません。ただ全体を通して読んでみると、「暗闇と光」「悪と善」「死と命」などという対立的な表現が多くなされていて、「イエス・キリストの神を信じる自分たちは、この世の悪とは別に永遠の命を生きて行ける」と言っているかのように読めてしまいます。何故そんなにも排他的で、自分たちだけを特別視するのでしょうか。その背景としては、恐らくこの手紙が書かれた当時の教会内部での信仰理解を巡っての対立と、それに伴って生じた多くの仲間たちの分離、分裂があったのだろうと考えられています。即ち、「どうしてあの人たちは、私たちの考えを理解してくれないのか」「私たちの教会から分離していった人たちは救われるのか。救われるのは私たちのはずであって、そんなことがあっては困る」。きっとそのような思いが働いて、自分たち救われる人たちと、自分たちと対立し分離していった死に至る人たちがいるという対立的な表現になっているのではないかと考えられています。

しかし、2000 年前にこの地上を人として歩まれたイエス・キリストの言葉と振る舞い、その価値観を思い返してみる時、これらの手紙の文章から、私たちが読み取るべきは、自分たち以外の人たちを断罪し、自分たちだけが永遠の命の恵みに特権的に与あずかるということではないはずです。そもそも、命とは誰の物で、どこ

にあるのでしょうか。11節12節を見ると、「命は御子イエス・キリストの内にある。御子を持つ人は命を持っている」とあります。13節には「これらのことを書いたのは、あなたがたが永遠の命を持っていることを知ってほしいからです」とも記されていますが、あなたがたは永遠の命を「これから持つようになるでしょう」ではなく、「今、持っている」「持ち続けている」と現在形で書かれています。

そもそも聖書に書かれている「永遠の命（ゾーエー・アイオーニオン）」という言葉は、私たちのこの地上での肉体の死後、時間的にずっと永続していく命ということではありません。むしろ時間という概念を飛び越えている「絶対的な命」、神様と結びついた「真実の命」（参照、ヨハネ 17：3）です。生命の創り主である神様と直接結びついた「真実の命」、他に掛け替えのない唯一無二の「絶対の命」、それが「永遠の命」という言葉で表現されています。

私たちは生命の神から、命を頂いて生きています。それは私たちの持ち物として、私たちが命を生きているのではなく、むしろ「命」の方が今、私たちが生きていた方が、適切なのかもしれません。ですから、全ての命、「絶対の命」が妨げられることなく、生き生きと生きられることが大切であり、そのような道を妨げることが「罪」や「不正」として記されています。16節以降は「死に至る罪」と「死に至らない罪」という表現が出て来ますが、これは「絶対の命」「真実の命」の道から外れているということです。16節にはそのような道を外れた仲間、「絶対の命」を大切に出来ていない人のために、私たちが祈り願い、関わることで、神様はその仲間にも命をお与えになると記されています。17節はギリシア語の原文とは正反対の意味に訳されていますが、元々は「不正はすべて罪ですが、それは死に至らない罪です」です。

そして19節以降がこの手紙の結論です。確かにこの世界には悪があり、多くの命が脅かされています。しかし、その中にも神の子イエス・キリストが来られて、真実の神と共に永遠の命、「絶対の命」を生きる道を示して下さいました。今、私たち全ての命は、そのイエス様の中に生きる者として、イエス様と共に生きる者とされています。ですから、私たちは他の人々を断罪したり、上から目線になったりせずに、生命の神から与えられる「絶対の命」が全ての人の中に息づいていることを覚えて、自他ともに全ての命を大切にして歩んで行きたいと思えます。

「今、命が私を生きている」……。病気のことをとっても、経済のことをとっても、私たちの生きている世界には、不安なことがたくさんありますが、命の神様はいつも私たちと共にいて下さって、私たちが今日も新しく生かして下さいます。